

私の研究

筒井 友弥

博士後期課程2年目の夏。それまで日本で温めていた博士論文の構想を、A4用紙10枚のドイツ語に訳し、以前から約束を取りつけていたある先生のもとへ向かった。一通りの挨拶を終えて、かばんから書類の束を取り出し遠慮がちに依頼した。„Können Sie mal das Konzept meiner Dissertation durchlesen?“

一瞬だが、その先生は微かに、でも確かに眉をひそめた。それから間もなくして、私はそれまでの構想を全くの白紙にし、心態詞 „mal“ のめり込んでいった。

とりわけ70年代以降の盛期を迎えるまで、心態詞研究は言語学の分野で周辺的な扱いしか受けず、心態詞はいわば „Papierkörbe der Sprachwissenschaft“ (言語学のごみ箱) に投げ入れられてきた。それから約30年が経ち、私はその「ごみ」の一つを拾い当てた。心態詞は、その特徴ゆえに、音韻論、形態論、統語論、意味論、語用論という言語学の諸分野を包括する研究対象であり、心態詞 „mal“ も、その捉えどころのなさに困惑させられる。それでいて、心態詞ほど社会的な相互コミュニケーションで欠かせない存在もない。もし本当に「ごみ」であるなら、いっそのこと捨ててしまいたいと思ったこともある。しかし、捉えどころのないこの「ごみ」は、視点を変えれば、多方面からの研究可能性を秘めているのであり、捨てるなどもってのほかのいわば「ダイヤの原石」である。このことに気づいて、私の研究は続いている。

まだほんの氷山の一角に触れたにすぎない私の心態詞研究において、これまで、多くの方々に数々のご助言・ご指摘をいただいたことに対し、心からの謝辞を述べるとともに、今なお私をご指導くださっている吉田先生をはじめ、公私にわたり私を支え続けてくださった諸先生、先輩、とりわけ田中雅敏氏と橋本将氏に、この場を借りて心よりお礼申しあげたい。

略歴 1976年福井県生まれ。広島大学大学院社会科学研究科博士課程後期に在籍。2000年度にマンハイム大学、2003年度にチュービンゲン大学で学び、現在、松山大学および京都外国語大学でドイツ語非常勤講師を務める。専門はドイツ語学、特にドイツ語の心態詞。

(つついともや)

筒井友弥君のこと

吉田 光演

筒井君が京都外大修士から広島大学大学院博士課程後期に入ってきた当初の印象は「やけに突っ張った学生だな」というものだった。入学早々、学内で広島獨文学会主催のドイツ人教授の講演会があり、軽い気持ちで彼も誘ったのだが、質疑の最後に挙手し、「先生の講演には感動しました。このような機会を与えられてとても嬉しい」と発言したのには驚いた。後で思えば、右も左も分からぬ地に来て、存在意義を示さねばと必死の思いであったのだろう。周りの雰囲気を観察し、突っ走りすぎて脱線することもあるが、失敗を恐れず最善を尽くす愛すべき若者である（私も後先考えずに行動する方なので人のことは言えないが）。広島の水が合ったのか、その後の彼は、Tübingen大学留学、学会発表、学会誌への論文投稿など、水を得た魚のように躍動し始めたのだった。

筒井君の研究テーマは心態詞の語用論である。doch, jaなどの語については、関口存男氏、H. Weydt氏、岩崎英二郎氏を始め、多くの先行研究があり、百花繚乱の觀がある。言語と言語使用者の関係を包括的に研究する語用論は、一見とっつきやすいが、逆に果てしなく奥が深い。その中で彼は、心態詞ではまだ手垢のついていない mal に着目し、心理学の統計手法や形式意味論、統語論をも学びつつ、方法論の検討とデータ分析を重ねてきた。malについて、他の院生も加わって延々と議論したことでも一度や二度ではない(分析案1、問題あり。修正案2、別の問題、案3、また別の――)。その労苦が報われたことを率直に喜びたい。そしてこれを糧に博士論文完成へと邁進されんことを祈る。

(よしだみつのぶ／広島大学教授)